

走るのはやめられない

週末、朝5時に起きて1時間ほど自宅の周りを走っている。外はまだ暗く、冷たい風が顔に痛いぐらいだが、走り終えた後は実に気分がいい。仕事でどんなに遅く帰っても欠かさないほど、すっかりはまっている。

マラソンを始めたのは昨年12月。取材で走ったのがきっかけだった。国土交通省の仕事に加え、たまに街の変化や流行りを追いかける「街ネタ」を担当。マラソンブームの取材で体験ルポを書くために、国交省での仕事の合間をぬって都内の観光名所を巡る20キロ超のコースに参加した。その日は記者クラブの自席から会見室に行くわずかな距離を移動するのも辛いほど足が動かず、目ごころの運動不足を思い知らされた。

再び走り始めた、というほうが正確かもしれない。幼い頃からかけっこが好きで、小学校高学年から大学3年まで陸上競技部に所属していた。短距離を専門とし、1秒、0.1秒と少しでも記録を伸ばそうと過酷な練習を積み重ねてきた。練習の一環でマラソンやトライアスロンにも挑戦した。高校時代は勉強した記憶がほとんどない。授業中は教科書を重ねてまくら代わりに居眠りし、チャイムが鳴ると同時にがばつと起き上がり運動場に向かっ

た。いつもジャージ姿だったので「お見合い写真もジャージがいいわね」と友達にからかわれたものだ。

それが社会人になってばつたりやめた。マスコミ志望でなかった私はたまたま受けた日経に入社。幸か不幸か、社内でも厳しくて有名な強面の記者が上司となった。取材が甘いと思われればなしで、気分転換に何かする気持になれない。今は子育てで精いっぱい、走るところか体を動かすのも億劫。休日は1分でも長く寝たいと布団から出られず2人の子供にお腹がすいたと起こされる始末。

今回そんな怠けた体に突然強く鞭を打ったわけだが、不思議なことに足の痛みが和らぐにつれ、むしろように走りたくなった。デスクに怒られたことや取材がうまく行かなかったこと、そんなもやもやが汗とともに流れる、その感覚が好き。

同世代の女性たちもマラソンにはまっている。しゃれたウェアを着こなしながら皇居の周りを颯爽と走る「美、ジョガー」の姿はあこがれで、私も美容のために続けていた。だが、根っから体育会系。「もっと速く走りた」と欲が出て、早くも大会への出場をもくろんでいる。

早速インターネットで検索してみると、全

国のあちこちで多くの市民マラソンが企画・予定されている。都内に住む私の知人は北陸地方で開かれる市民マラソンに泊まりがけで行くという。それを聞いた時、マラソンこそ街おこしの救世主になるのではないかと思つた。ある限られた観光地だけをみてさっさと帰る旅と違い、地元の人々の声援を全身に受けながら

地域に溶け込むように一歩一歩進んでいく。ゴールした後にはふるまわれる食事はどんな高級レストランの料理よりも絶品。マラソンは地域の魅力を知るのもってこいの手段なのだ。

しかも、どの大会も雰囲気や景色が異なり、個性がある。各地にどんな魅力的なコースがあるか、考えただけでわくわくする。スタンプラリーのように、一定以上の大会を制覇したら何か特典がもらえるといったイベントがあったらうれしいと思う。名所を抱える



観光地のような派手さはないが、のどかな自然や温かいもてなしなど、すべてが地域資源となり、噛めば噛むほど味わいがあるような地域にこそマラソンによる街おこしは効果的ではないか。もつとも走るの好きな地方部記者の個人的な意見ではあるが。